

田尻英三教授の定年退職に際して

経済学部教授田尻英三先生が本年3月末日をもって龍谷大学を定年退職されます。

先生は、平成10年4月1日に龍谷大学に着任以来、本学の日本語教育の充実と留学生別科の発展に貢献してこられました。

また、本学の留学生の窮状を見て「龍谷大学留学生交流会」を組織されるなど特に留学生への支援には尽力してこられました。先生の研究室には毎日のように昼夜分かたず学生が進学を始めさまざまな悩み事や相談事で訪れていますが、どんなにささいなあるいは個人的な内容でも先生は親身になって接しておられました。年に何度かはお自宅に学生を招いて奥様の手料理で日本家庭の体験の機会を提供されるなど、公私にわたり長く留学生をサポートされてこられました。一途に留学生を支援したいという先生の情熱によるところが大きかったのではないのでしょうか。先生の優しく包み込む人間的な温かさに対して学生たちも「田尻先生は恩師であるとともに日本のお父さん」と慕っています。昨年と同留学生会の忘年会の挨拶で先生は文字通り慈父のようなまなざしで会場を見回し「留学生のみなさんは私の宝です」との発言された一言は万感が込められていたものと拝察します。

先生のトレードマークと言えば、インドネシアのパティックをお召しになった姿でしょう。先生が、外務省所管国際交流基金より1年間インドネシアの名門国立パジャジャラン大学へ日本語専門家として派遣されたことが先生とインドネシアを結びつけるご縁となったようです。インドネシアの日本語教育は、現在でこそ日本語学習者数約87万人と世界2位の規模ですが、先生が赴任された当時は全国でも2000人足らずでした。当時のお弟子さんたちが教師になり、現在は孫弟子の皆さんも多数インドネシアの大学や高校の教壇に立ち、曾孫弟子に日本語を教えておられることを考えると先生のご努力で現在のインドネシアの日本語教育の発展の礎ができたのだと言っても過言ではないでしょう。先生の下には今でもインドネシアから論文指導や訪日研修等さまざまな相談や依頼ごとが寄せられていて、先生は実に30年以上に亘りインドネシアと関わっておられることとなります。

インドネシアから帰国されてからは、日本語・インドネシア語の対照研究へさらに日本語教育へと研究、活躍の場を広げていかれました。先生は常々、日本語教育に起因する今日的な社会的課題が山積している現状に対して、日本語教育関係者の社会への参加度・発信度の低下を危惧され「日本語教育関係者は教育政策にもっと関心を持つべきだ」と説き、ご自身の著書を通して社会に発言され、警鐘を鳴らしておられます。また発言だけでなく進一氏と日本で最初の日本語教育ネットワーク「九州日本語教育連絡協議会」を立ち上げられたり、文化庁の諸委員会の委員、日本語教育学会の大会委員長をはじめ、諸委員を歴任されたりするなど、精力的に行動してこられました。

そして内助の功という表現は今では流行らないかもしれませんが、奥様も先生とともに留学生一人一人へのお世話、留学生交流会へのサポートを惜しみなくしてこられました。留学生たちは先生同様奥様のことも「日本のお母さん」と敬意と親しみの念を持って呼びしていました。奥様がこれまで留学生を温かく支えてくださったことに対しても衷心よりお礼申し上げます。

最後に、これまでのご指導の数々に対して深く感謝申しあげるとともに、今後とも健康に留意され引き続きご指導くださいますようお願い申しあげる次第です。

2015年2月

国際センター長 ホワイト ショーン
文学部教授 三原 龍志